シャッター以後ー3
「窓、あるいは孤独の処方箋」

表紙写真●本橋成一
文●村石　保

例えば……、
老婆の背中に降り注ぐカーテン越しの光が創り出す足もとの影こそが、
彼女の孤独の深さにほかならず、
ゆえに世界のすべての窓は孤独に満ちている……。
と、思っていたのは 10 代後半までのことである。

実は写真家こそが……、
ファインダーという窓をのぞき込みながら、
孤独そのものをフレーミングする術を習得している世界で唯一の職業だと
気付いたのは、
50 代も半ばのことである。

だから写真家は……、
孤独への処方箋は孤独でしかないとばかりに、
とうに 60 を超えたであろう老婆の、
＜孤独＞を瞬時にフレーミングしてみせてくれるのであろう。

セミパラチンスク訪問記

ポリゴンに立つ

神谷さだ子

1949年8月29日、第一回核実験が行われたポリゴン。
ステップ草原に、実験監視塔が立っていた。

グランドゼロ GROUND ZERO JCF 73秋

目　次

セミパラチンスク訪問記

セミパラチンスク訪問記
ポリゴンに立つ＜神谷さだ子＞ 5

原発のない社会をめざして

「六ヶ所村ラプソディー」松本上映会
鎌仲ひとみ監督講演記録「生活の意識改革を」 14
高校生スタッフのメッセージ 20
私のできること 22
柏崎刈羽原発近隣の住民の声 24

イブラヒム先生スピーキングツアー

イブラヒム先生スピーキングツアー 27
想像するということ＜片岡寿美江＞ 30

連載

モスクワ便り 33
連載随筆「新しい器」＜宮尾彰＞ 34
ロシア小話 36
振替用紙のメッセージから 38
ありがとうございました！ 40
「ナジェージダ＜希望＞ 2007」募金のお願い 42
ベラルーシの食卓 43

出会い　Встреча 44
Здравствуйте！（事務局広場） 52
カルチャー・レヴュー 54
インフォメーション 58

表紙写真　本橋成一
文　村石　保

セミパラチンスク訪問記

ポリゴンに立つ

神谷さだ子

ガイガーカウンターで測定

日本から放射能測定器を持参した。文科省から借りた「はかるくん」だ。最高値9・999を示したまま、動かない。「はかるくん」は測定不能に陥った。途中セミパラチンスク検診センターから借りたガイガーカウンターのスイッチを入れた。40マイクロシーベルト。私たちが暮らしている日本の通常環境放射線の800から1000倍に針が振れる。

中央アジア、カザフスタン、セミパラチンスク。ここでは、1949年8月29日から1991年8月29日までに、500回以上の核実験が行なわれた。60年近く経った今も大地は、放射能に汚染されたまま。そして半永久的にこの地から放射能が消えることはないだろう。

もう58年の月日が流れた。広大なステップの只中にある凹み。この場所、この地点から大天空に向って大きなきのこ雲が広がった。1949年8月29日、旧ソ連邦における初めての核実験が行なわれた。まさにその爆心地（グランド・ゼロ）に私は立っている。地平線が真一文字、360度の大平原だ。凹みから等間隔で、コンクリートの低い塔が並んで立っている。近いところほど、無残に崩れ朽ちている。枯れた平行葉脈の草が一面に大地を覆いつくしている中に薄紫の野菊に似た可憐な花が咲いていた。

「私が8才の頃からだった。突然家が揺れるので、外に飛び出した。空に赤く、まわりは黒いきのこ雲が上がった。振動で、家の棚が壊れたよ」。

チャガ村の入り口でゲナジーさん出会った

秘密都市クルチャトフからの帰路に寄ったチャガ村の入り口で出会ったゲナジーさんは、こう語った。自分は特に健康に問題はない、しかし、二人の娘と将来の孫たちは心配だと言う。

村に入っていくと、トラックから建材を降ろす作業をしているビケロフさんは、仕事の手を止めて、話してくれた。

「1949年、私は10才だった。8月の最初の爆発を覚えているよ。村に軍隊がやってきた。1時間くらい軍の飛行機が何機も飛んでいた。大きな爆発が起こった。外に出た。大きなきのこ雲が上がった。軍から〝見てはいけない〟と言われた。だけど、子どもにそんな事を言ってもきかないよ。面白がって見たものさ。

〝目が痛くなる。見てはいけない〟と言われるが、爆発のたびに見たよ。家が揺れた。大きなきのこ雲が上がった。私たちは、爆発を核だとは知らなかったんだ。ポリゴンの近くに住む人にはお金が渡されていたらしい」チャガ村は、グランド・ゼロから数十キロ余りの小さな村。広大なステップ草原の中で、羊や馬を飼う、素朴な暮らしを続けてきた人たちだ。放射線リスクを何も知らずに、轟音ときのこ雲を、繰り返し見つめる子どもたち。

子どもの頃、きのこ雲を見たというビケロフさん

近くを流れるイルティッシュ川沿いに緑の木々がつながっている。この地で、核実験が繰り返されたのは、モスクワから遠い辺境の地だからなのだろうか。風に唱和し、馬乳酒を含みながら、親から子へ、そして孫へと歌われる人々の詩がある、中央アジアのステップ地域だ。

大国の覇権争いのために核兵器は開発された。第二次大戦後の冷戦構造の中で、核実験を繰り返すことがグローバリズムの御旗を振ることだった。関わった物理学者・建築家たちは、ソ連邦えり抜きのエリート達。実験が成功すると報奨金が付いたという。

JCFとして、チェルノブイリ原子力発電所の爆発により拡散した放射能汚染地への支援と交流活動を続けてきた。世界共通語「ヒバクシャ」という言葉を介して、ヒロシマ・ナガサキを経験した日本に寄せる世界各国の人々の共感を感じてきた。旧ソ連邦の核実験場に立った私は、放射線被害に共通する支援ができるのだろうか、という問い

と、核実験が日本の現在の私たちの暮らしに何を発信するのか、という今日的意味を自らの内に反芻しながら、８月30日から９月12日まで、初めてのカザフスタンを歩いた。

「セミパラチンスクを閉鎖したのは、私たちです」

イリーエバ・ウルクスさんの言葉に、私は思わずうなずいていた。

「１９８９年２月でした。私は、アルマトイ教育大学で教えていました。それまでは、セミパラチンスクで核実験が行なわれていることを聞いても、〝強い国―ソ連邦〟のためと信じていました。ある時、噂が流れてきました。詩人で国会議員のオルジャスが演説するというのです。大学近くの広場には、たくさんの人が集まっていました。彼の演説は熱気があり、私たちを感動させました。国と軍がセミパラチンスクで行なってきた核実験は、太古よりこの地に暮らす人々の生命を危険にさらしている、断固セミパラチンスクでの核実験に反対する、と言うのです。私は、大きなショックを受けました。大学を飛び出し、運動に参加しました。故郷の村に帰りました。ここには、いまだに、水道がありません。人々は村に点在する井戸から水を汲み、電気も余り使わない生活をしています。でも、そんな太陽と自然の恵みをいっぱい受けて暮らす方が、人間にとっては幸福なんです。

太陽光利用を説明するイリーエバ・ウルクスさん

反核運動は、『ネバダ・セミパラチンスク運動』として、広く展開していきました。この運動を通して、私はセミパラチンスクの核実験がこのカザフスタンの国内だけでなく

井戸水を汲む村の少年

隣の中国にも、ひどい被害をもたらしたことを知りました。中国ロブノール地方でも奇形児が生まれたり、癌が発生したりしました。私は、中国の人たちとも連帯していきました。日本にも、１９９５年から４回行っています。１９４９年８月29日は私たちにとって大きな意味を持ちます。日本でも１９４５年８月は、同じように意味あるものです。

今、私は世界の反核運動と地域の貧困克服と自然エネルギーの活用に取り組んでいます。

見ていってください。カザフスタンには、あふれんばかりの太陽エネルギーがあります。１年のうち７ヶ月間は、ここに水を通して、太陽光で暖め、近くの子どもの家に給湯しています。親の愛に恵まれない子どもたちばかりですから、とても喜ばれています。杏やリンゴを太陽光で乾燥させ、アップル・ティーを作り、売っています。ほら、ポットに入っていますよ。どうぞ、飲んでください。活動は、生活に結びついています。世界中の反核運動、エコロジストたちと連帯していきます。あなた方も、ぜひ、また来てくださいね。いつでも待っていますよ」。

家庭菜園に組み立てられている温室の屋根で乾燥し作ったアップル・ティーは、自然のふくよかな甘味、太陽からの贈り物だった。命とは相容れない核に反対し続けて生きてきたイリーエバさんは、ごく自然に太陽の恵みを活かした生活をし、地域にも還元している。

懐の深い、暖かいお母さん。女性ならではの反核運動と生活の実践だろうか。

「私たちは、50～60年代からセミパラチンスクで住民の健康調査をしてきました」

カザフ国立放射線腫瘍医学研究所のサイム・バルムハノフさんは、核実験場近辺の村々で、住民の被ばく線量と健康被害の調査に長年取り組んできた。

バルムハノフさんが、高齢のため足を引きずりながら取り出してきた調査書は分厚く、表紙を開くと、「トップシークレット」のスタンプが押されていた。１９５８年にカザフ科学アカデミーの調査報告として、このデータをモスクワに報告した。しかし、言下に却下された。中央政府は、核実験が人々の健康に害を及ぼしていることなどまったく認めようとしなかった。核の保持が、国の威信を保つことだった。

カザフ国防当局は、バルムハノフさんたちカザフ共和国科学アカデミーが作成したデータに対抗して、調査報告書を出した。

「それは、私たちが調査したものとは、大きく違っていました」ドロン村、カイナル村住民の被ばく線量は1.2倍から3倍以上の開きがあった。実験回数も違っている。これらの数値いかんに関わらず、地域住民の受けた被害が物語るものがあるはずだ。バルムハノフさんたちの不屈の精神は、どこに起因するのだろうと思った。

バルムハノフさん

「私たちは、当局の弾劾の下で、歯を食いしばったわけではありません。モスクワの科学者と協力して、医学的調査に当たりました」

年を重ねられたバルムハノフさんのおおらかな語り口も加わってか、彼らがこれほどに熱心に取り組んでこられたのは、政治的な葛藤に捉われずに、科学者として現実を見つめようとしたからに他ならないと感じる。その純粋な目線が私たちに伝えてくれるデータの数値に、人間の温かみを通わせている。

核実験前まで、セミパラチンスクの新生児発達障害はカザフスタンの他の地域と特に変わらなかった。ところが、60年代から年々増え続けている。皮膚がん・乳がん・肺がんも、他の地域よりはるかに罹患率が高いという。

放射線の影響は、土壌・動植物・人間に対して、物理的に医学的な調査を積み重ねても、確実なデータとして認定されるのは難しい。測定方法・母集団の取り方など複雑な問題がある。

しかし、その地域住民に何が起こっているかは、2世代・3世代にわたって丁寧に関わっていくことで、人々が受けた社会的・心理的被害、健康被害がわかってくると思う。

バルムハノフさんの目は、1930年代からスターリンの少数民族囲い込みによって餓死したカザフスタンの人々、続く核の被害に苦しむ人々に向けられてきた。終生モスクワに対しセミパラの真実を語ってきたバルムハノフさんはこう言われた。

「そこに住んでいる人たちがいるんです」

人を育て、協力関係をつくる

今回のカザフスタン訪問は、長年セミパラチンスクの放射線リスク調査と支援に取り組んできた長崎大学医学部の河野茂医学部長、山下俊一教授、高村昇准教授らに同行させていただいた。長崎大の先生たちとは、チェルノブイリ支援でベラルーシ、ゴメリを訪れた時、何回も現地で会っている。チェルノブイリ支援も熱心に展開しているが、1995年から、セミパラチンスクにも取り組んでこられた。

9月4日からカザフ医科大学、がんセンター、健康増進センターなどを訪問した。カザフ医科大学で、河野医学部長は医学生たちに、長崎大学医学部150年の歩みを語った。江戸の昔、ポンペ医師が長崎にやってきたことから、歴史が遡られた。遠い異国で、この話が伝わるだろうか、と私は席を立って、最後列に行った。暑い日で、教室にはいっぱいの学生たちだった。河野先生の話が永井隆博士に及んだ。教室内の空気が変わった。永井博士が二昼夜、寝ずに被爆者の治療に当たって、家に帰った時、ロザリオが溶解して付着した骨盤を見つける。お連れ合いの身に着けていたロザリオだった、と語り写真が映ると、学生達はキーンと張り詰めて、河野先生の講演に引き込まれていた。背中が前に乗り出していくのがわかった。被爆地長崎の医学部として、世界のヒバクシャ医療に貢献したいという河野先生、長崎大学の姿勢は、ストレートに伝わった、と思った。

カザフ医科大学で長崎大学医学部 150 年の歩みを語る河野医学部長

医科大学のガビット医学部長は、流暢な日本語を話す。長崎大学で11年間研究生活をし、故郷に戻った方なのだ。また、訪問団の細やかなコーディネイトと通訳をこなしていくセリックさんは、原爆後障害医療研究施設の助教と

長崎大学医学部のみなさんと

―原発のない社会をめざして―

7月16日、新潟県中越沖地震が起こりました。*M* 6.8。東京電力柏崎刈羽原発は、マスコミに報道されている以上に破損しているようです。私たちは「六ヶ所村ラプソディー」上映を通じて、地震列島日本にある原子力発電所、再処理工場の問題点について学びました。

して働く。日本滞在は9年、長身の好青年だった。アイヌールさんは、まだ日本は半年というものの、素晴らしい気働きでてきぱきと私たちをフォローするチャーミングな女性だ。優秀な人材を日本と支援地との架け橋として育て、より一層協力関係を強固なものにしていく。日本語に堪能な現地医療専門家とスムーズなディスカッションができる。長崎の方法に学ぶことが多かった。

セミパラチンスク診療センターに、検診バスをはじめ、さまざまな検査機器を支援し、現地ドクターによる検診体制の構築をする一方で、こうして人材育成をきちんとしてきたことが、将来的にもいかに大きな成果を期待できるか、見せていただいた。

セミパラチンスクの検診センターで、ＪＩＣＡプロジェクトで支援した検査機器を点検していく山下先生に同行した。血球計算機は消耗品が切れたまま使われていず、超音波診断装置はプローブが壊れていた。チェルノブイリ支援では、年一度は点検整備のためにメディカルエンジニアの訪問団が渡航する。ＪＣＦの得意な支援をここでも活かせないだろうかと思った。消耗品を企業から寄付していただくよう、呼びかけるのも一手だ。今後、ＪＣＦの検討課題としたい。

セミパラチンスク診療センターでの山下先生

セミパラチンスクでは、１９９１年8月29日を最後に核実験は終わった。実験場は閉鎖された。今後、秘密都市クルチャトフは、核研究施設として利用される方向だという。現在約一万人が働いている。汚染されたステップの中で、なんの研究が進められるというのだろう。「核は命と相容れないもの」とてもシンプルな絶対命題がある。インド、パキスタン、北朝鮮から核実験の報道が伝えられる。この地で５００回以上も繰り返された核の恐怖は、伝え続けなければならない。次世代までも、ずっと半永久的に続く恐怖を。

核保持が大国の条件となるグローバリズムに「ニェット（ノー）」と言おう。地元から立ち上がったイリーエバさんたちは、私たちを励ましてくれる。

改めて思う。核による核の抑止力などありえないのだ。

松本上映会
鎌仲ひとみ監督も参加

鎌仲ひとみ監督講演記録
「生活の意識改革を」

「六ヶ所村ラプソディー」松本上映会（2007.9.16）

ドイツ製の太陽光発電装置付きバッグの説明をする鎌仲監督

「イラクの子どもたちは被ばく者である」

『六ヶ所村ラプソディー』は約1年4ヶ月半前に制作以来、自主上映で250回を超えた。2日に1回は日本のどこかで上映。ほとんど口コミだけで広がった。前作の『ヒバクシャ世界の終りに』以降、NHKテレビ番組を作っていたが、また映画の世界に戻った。同じテーマのシリーズとして本作を作った。

自分の育った富山県は読売新聞を作った正力松太郎の出身地。読売は原発を次世代のエネルギー、社としてよしとする会社。子供のころから大学まで読売新聞しか読んだことがなかった。そんな中で、広島と長崎の原爆は済んだことであり、原発は核の平和利用だから未来の豊かな生活を保証するということを物心ついたころから叩き込まれた。疑問を持つことがないままに過ごした。自分が生きることと、核、放射能、被爆、とは全く関係がない状態でマスコミの仕事を始めた。よって、自分が作る作品にもそういうことをテーマにしようというつもりは全くなかった。

1998年に、たまたまイラクで通訳をする女性と知り合い、子どもたちがガンや白血病で苦しみ薬もないことを知り、フリーランスとして番組を作っていたので、NHKにこの問題をとりあげることを提案し、取材した。そして

初めて自分の目でイラクの子どもたちがどんな状況に陥っているのかを見た。信じられない。小児白血病は85％は治癒可能だが、98年当時はほとんど助からなかった。それは薬がほとんどないから。なぜか。国連が抗がん剤が大量破壊兵器の材料になるかもしれないといって輸出を制限したのだ。白血病の子どもたちは出血多量で死ぬ。無残な死に方、悲惨な状況。薬を持っていったがすぐなくなり、親からはカメラではなく、薬を持ってきてくれと言われた。この現実を世界や日本に知らせることでもっと薬が来る可能性があるから取材させてくれとお願いした。

日本に帰り、なんとかNHKで放送できた。600万人が見たとのこと。でも世の中は何ひとつ変わらなかった。テレビは何の役にも立たないと思った。99年に放映し9年経った。15歳以下の子が60万人死んだ。医療支援をしたいと思い、当時83歳の肥田先生に会いにいった。肥田先生は広島で被ばくし、それ以来、被ばく者の医療だけをしている。先生はさらっと「イラクの子どもたちは被ばく者である」と言った。「劣化ウラン弾によって、内部被ばくしている。それは今の医学では治すことができない」大学を出てマスメディアの中で仕事をしてきたのに、そんなことは聞いたことがなかった。びっくりした。NHKの番組は医療さえあれば子どもを救えるというメッセージだったが、それは本質的なことではなかったことに気がついた。治せない内部被ばくをした日本の被ばく者をどうやって治すのか先生に聞いたら、被ばく者は必ずガンになるからそれを早く見つけて治療するしかないとの答えだった。広島や長崎で、肉親を捜したり、片付けをしていた人たちが、今、いろんな病気を発症している。定まった病気にならず人それぞれ。62年前、みんな子どもだったころに被ばくした。それはまさにイラクの現在と同じ状況。本質は変わっていない。しかも世界に広がっている。目からうろこが落ちた。

日本で電気を使うためのゴミが劣化ウラン弾

これに気が付き作ったのが『ヒバクシャ世界の終りに』。イラクやアメリカに行き、世界で初めての再処理工場を見た。核弾頭のプルトニウムを作った工場。六ヶ所村の再処理工場は正確にいえば、プルトニウム製造工場。この工場の風下で大量に放出された放射性物質を浴びて土地が汚染され、被ばくした農民を取材した。3つの国で内部被ばくした人たちの実態を知った。作るのに6年かかった。6年目にもうひとつの衝撃的な事実に出会った。日本で電気を使うためのゴミが劣化ウラン弾になっていた。日本は濃縮ウランをアメリカから買っている。濃縮した時の廃棄物が

劣化ウラン。日本の電気を作ったあとの廃棄物が劣化ウラン弾の原料となっている。では電気を使わずに生きられるかと言えばそんなことはできない。

六ヶ所村と正面から向き合う映画を

より多く電気を使う、無駄に電気を使う日本の社会に生活が埋め込まれていて、私はすぐにそれを変える方法を思いつかなかった。それで、55基の原発からの廃棄物が運ばれる六ヶ所村に注目した。再処理工場が何のために作られるのか。アメリカは核兵器のプルトニウムを作るため。日本は次世代のエネルギーを作るため。これらの原子力産業について何も知らなかった。そして自分たちの使う電気の1／3が原発からくることにようやく気がついた。読売から始まって核の平和利用とずっと刷り込まれてきたものが破たんした。いろいろな疑問が噴出してきた。

日本には7つのテレビ局があり、日夜放送しているのに、六ヶ所村をテーマにして再処理工場が我々にとってどんな意味があるのか、きちんと描いた番組がいまだかつてひとつもない。六ヶ所村の作品を作る提案をするのに覚悟が必要だった。誰が見るのか？誰も興味をもたないのではないかと。自分もそうだったから。だから、そういう無関心な人々に見てもらわないと意味がない。ただただ反対、という映画を作ることにこれっぽっちも意義を見いだせなかった。

微量だから大丈夫と言われる放射線で被害をこうむっている人たちに直接話を聞いた。その人たちの被害はすべて否定され、放射能のせいではないとされてしまっている。そんな中で再処理工場が２００８年2月から動くと何が起きるのか、自分はそれを証明できないけど想像することはできる。『ヒバクシャ世界の終りに』を見ていただくと、六ヶ所村の未来がそこにあるとも言える。だが、そのことを、全く何も知らない人たちに知らせるという困難が横たわっている。

そこで、自分の体験したこと、持っている知識を全部横において、真っ白になって、六ヶ所村で起きていることと正面から向き合おうと考えた。そうしないと、真っ白な何も知らない人に伝わらない。原発が安全である、放射能は微量である、原発は必要と言っている人たちの声も聞かないとメディアを作るものとしての資格がないと考えた。だから反対や賛成を超えたものを作らないと人々に届かないと思った。

六ヶ所村では、反対の人は数名しかいないけどこの人たちはみな取材に応じてくれた。それ以外の人たちは取材に応じてくれない状況が1年くらい続いた。日本原燃も取材を断り続けた。私が記者クラブの人間ではないからというのが理由。そこにはすごい閉鎖性がある。私の仕事は開くこと、知らせること。腹が立った。向こうが開かないならこちらが開こうと思い、映画ができる前に映画の内容を公開しようと考えた。それが『六ヶ所村通信』というビデオレター。どんな取材をし、話を聞いたかを3か月に1回発行した。まっ先に原燃が買い、役場が買い、推進の人たちが見た。それを買った人たちを狙い撃ちにして取材を申し込んだ。反対が4、5人しかいないのに、マスコミはそればっかり取り上げる。外から見ると反対ばかりが目立つ。彼らにはそんな不信感があった。

映画完成後六ヶ所で無料の試写会をやったが、ほとんど集まらなかった。日本中で上映会をやっていると六ヶ所や青森の出身の人がたくさん見に来て、ぜひ地元の人たちに見せたいという。でも、まだ六ヶ所村での自主上映会は実現できていない。

青森県内では上映会がたくさん行われるようになった。花とハーブの里にも毎週50人くらいの若者が全国から集まるようになった。映画後の様子もビデオレターで伝えることにし、先日、取材に行ってきた。多様な人たちが多様な切り口で、菊川さんのところを訪れるようになった。菊川さんは誰にでも同じように丁寧に対応している。そのことをきっかけにもっと違う視点で六ヶ所のことを知ってもらうことになるから、多様な人が来ることはいいことだ、と言っている。

若者たちの間でも、それぞれのやり方で六ヶ所のことを知らせる動きが広がっている。

映画を見た後で、「では自分は何をしたらよいのだろう」という問いが起きるのだ。

生活の意識改革を！

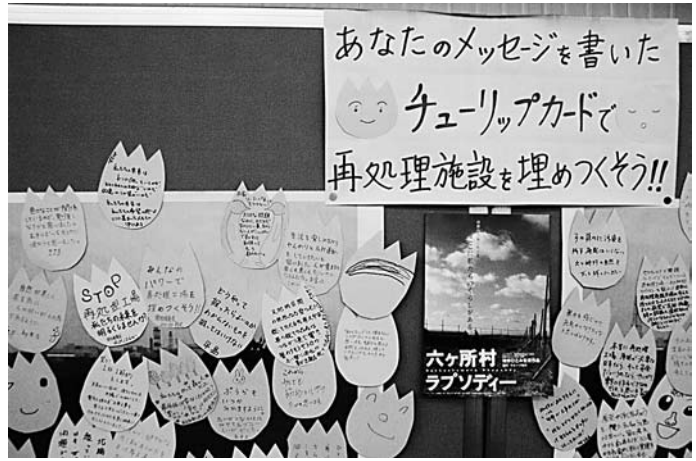
今日のトークのテーマを「生活の意識改革」とした。生活の意識改革というのがわからないと、この状態を根本的に解決することはできないと考えている。これは単に省エネしようということだけでない。日本という国が原子力立国、核燃サイクルを国策として選び、再処理工場を動かしてプルトニウムを作って次の世代の燃料にすると決めている、ものすごく莫大な国家予算がその事業に注ぎ込まれていて現在と未来に影響を与えているというのに、こんなにも知られていないということ。私たちが選択したのだろうか？選択したどころか、みんな何も知らない。知っているひとは1％以下だと思う。近未来、そして１００年後にど

んな影響があるのかということに対して、考えている人は本当に数が少ない。

あたかも私たちの選択かのように、私たちの税金が投入されて進められている原発事業。取り出したプルトニウムをどうするのか再処理工場の部長に聞いてみた。使い道がないじゃないですかって。実はプルトニウムを燃料にする原発は世界の中に存在していないのだ。50年後、100年後にできるかもしれないけど、今はあてがない。「そんなこと私に聞くんじゃない。私は社員だから。作れと言われているから作っているんだ。そういうことは国に聞いてくれ」と言われた。これがポイント。私たちは、国策だから、会社の方針だからと言って、なにか疑問や矛盾があっても思考停止にして、ただ受け入れてやっていけばいいんだ、という生活をずっと長い間送ってきたのではないか。それが今の日本にいろいろな問題を起こしているのではないだろうか。

先日、日比谷野音のUA（ウーア）のライブコンサートでアンコールも終わって盛り上がり最高の中、UAに頼まれ5000人の前で六ヶ所のことを話した。シーンとしてしまったが、みんなよく話を聞いてくれた。でもそんな話は聞きたくなかったというファンもいたと思う。UAにどうしてこんなことをしたのか聞いたら、「苫米地さんが言っていたじゃないですか。中立ってのは推進だって。自分も何かしなければと思った。自分にできることはコンサートで鎌仲さんに話してもらうことだと思った」

愛媛県の小さな村ではIターンした自然農、有機農を目



指す若い人たちが上映会を開いた。年収150万以下で、人も少ない村なので赤字になったが自腹を切って開いてくれた。

自分のこととしてとらえて、対話を生む映画に

普通のテレビ番組の作り方は、番組の始めにつかみを持ってきて思考停止にさせ、終わりには答（落ち）が用意してあって、何にも考えずにすむ、答もあるのでそこに描かれたことは自分には関係がないものとなってしまう。そういう番組がいい番組であって、私もそういう番組を作ってきた。これでは自分の問題としてとらえることができない。この映画には落ちがない。だって、まだ問題は解決していないのだから落としようがない。

問題は継続しているのに、国民にはそれは知らされていないし、国民も考えないままという現実。

信濃むつみ高校のメンバー（左から佐藤さん、塩原さん、山田君、西澤さん）と鎌仲監督

そこが変わらなければ、何も変わらない。一人ひとり全員がかかわっている問題だということをわかってほしくて、こんな作り方をした。

マスメディアの力は、私たちを思考停止にして、あるメッセージを叩き込む、それが全てのマスメディアにしみわたっている。つまり、あなたたちは考えなくていいのよ、という基本メッセージ。もし私がこの映画に再処理工場をやめようというメッセージを入れると、それはまさしくプロパガンダ、情報操作になってしまう。対立を生みだすのではなく対話を、思考停止になるのではなく自分のこととしてとらえる、そういう映画にしたいと思って作った。推進派とも話をしたが、みんないい人だなって思った。ひとり一人だれも悪者がいない。誰かを悪者にすることでTV番組はなりたつ。誰かを悪者にすることですませてきた。これでは解決しない。みんないい人なのに、みんな生活するのに一所懸命なのに、なぜこうなるのか根本的なことを見なければいけないと思う。それをどうするのかについては、これから若者たちとの対談があるので、そこで話し合いたい。

文責：平島安人（松本上映会・実行委員）

上映会代表として

山田将史（信濃むつみ高校3年）

僕はこの上映会を通して、自分の考え方が変わったと感じました。当初は、環境の授業を受けたのがきっかけでこの実行委員に入ったんですが、映画を上映することに興味を持って入ったので、この六ヶ所村というのはいままで知りませんでした。そして、内心自分が実行委員長でいいのかな～?と思っていました。

しかし、実行委員の人達と上映会に向けて準備をしていくうちに、しだいに実行委員の人達とも慣れて、この上映会を成功させよう！という気持ちになりました。

また、実行委員内でやった学習会を通して、六ヶ所村に関連するさまざまなことについて学び、自分の生活を振り返るきっかけにもなりました。いままで自分の生活についてや原子力発電所のことについて考えたことはなかったので、この機会で考えることができてとても自分のためになりました！

本当に感謝です！

上映会HPで発信を続けます！

塩原夏実（信濃むつみ高校2年）

正直上映会が終わってしまって、寂しさや虚脱感やら、ポッカリ穴が空いた感じもし、それでいてホッとしてたりもしてます。いままで張りつめてた分、しばらくは抜け殻かもしれません。しかし達成感や喜びもとても大きく、この上映会に携われて本当に良かったです！

私なんかは大人に混じるどころか、山田さんやはるかさんという同世代と活動することもほとんど無く、外に出て自分の考えや行為を示すということも、今までにない経験でした。戸惑いも不安もいっぱいあったけれど、今では良い思い出ですし、人と関わることの楽しさや、そこに生まれる力を体感し、世界が広がった様です。

一番感慨深いのは、映画を上映するというアクションを起こして初めて、人に多くを伝えられ、人の心を動かせた。どんなに高い志や知識を持っても、殻にこもっていたら何も変わらないんだなぁ…という所。今までの自分はそれに気付いてなかったので、カルチャーショックのような感じです。

――なんだかちっとも言い足りないのですが、言葉にも出来ません。胸がいっぱいです♪

今、節約はカッコいい！

西澤はるか（信濃むつみ高校3年）

私は、原発になんて興味もなく、ただ上映会当日のボランティアとして手伝うつもりが、会議に行くなかで、実行委員会の一員になっていました。

映画を観て、初めて再処理工場の事も知りました。また、明治大学で行われた「七夕学習会」に出席したことで、もっと原発について知りたいと思いました。原発について勉強していくと、ショックなことばかりでした。

映画の中で、六ヶ所村の人々が再処理工場の建設に猛反対していたのに結局は建ってしまいました。政府は国民の声を無視し、権力を振りかざしたように思えました。

再処理工場が建てばお金が入ってきたり、求人や所得については、数字的には多少改善されたでしょう。でも逆に放射能の汚染という点で農家の人々の生活を苦しくさせました。

私は、原発ゼロの社会にしたいです。原発は、危険で環境にも人にも悪いからです。最近、中越沖地震の時に原発の事件が大きくニュースになりました。地震の多い日本で放射能が漏れないという確実性なんかないと思います。もし地震で放射能がもれたら日本だけではなく世界的に被害を及ぼすことになるでしょう。

また、今もなお、原発の下請けで働いている人々が内部被ばくをしている現実があります。そう思うと、エネルギーを大切にしないといけないと思います。

日本は大量生産・大量消費の社会です。そんな社会が続くと思いますか？私は思えないです。日本は社会体系を変えていかなければならない時にきていると考えます。

しかし、それには、ものすごく大きな壁があります。これは長い長い戦いになると思います。

そして、環境において今私たち個人にできることは節約だと思います。

私は節約というと貧乏くさいイメージがあったけど、そんな時代は終わりだと思います。

節約は、いろいろなエネルギー消費量削減へつながると思います。又、原発にしても火力発電にしても環境には悪いので、どっちにしてもエネルギー消費量削減は必要だと思います。まずは身近なことからはじめてみませんか？みなさんの力が大きな力になることを信じていきたいです。

本当は、もっと伝えたいことが山ほどあるのですが、このくらいで終わりにしたいと思います。

何とかしたいと思った・・・

私のできること

＊もっとよく知る

・原子力資料情報室（反原発の学者が作るホームページ）
http://cnic.jp　　tel 03-3357-3800

・冊子『知ることから始めよう』（３００円）
スロービジネスカンパニー　　www.slowbusiness.org

＊がんばっている人とつながる

【再処理とめよう！全国ネットワーク･連絡団体】
①花とハーブの里＆牛小舎　（映画に出てくるチューリップ園の菊川さん）
http://www.infoaomori.ne.jp/~ushigoya/
②みどりと反プルサーマル新潟県連絡会
homepage3.nifty.com/fukurou-no-kai/mox/0501niigata.htm
③グリンピース・ジャパン　www.greenpeace.or.jp
④グリーン・アクション　　www.greenaction-japan.org
⑤美浜･大飯・高浜原発に反対する大阪の会　www.jca.apc.org/mihama
⑥脱原発ネットワーク・九州　www.elementalworks.com/nonaction1.html

・ＳＴＯＰ　ＲＯＫＫＡＳＨＯ　　坂本龍一さんが、立ち上げたサイト
http://stop-rokkasho.org/　音楽やアートを通じて世界中に広がっている

・Ｗａｌｋ９　正木高志さん率いる若者たちが、春分の日に出雲を出発し,各地の原発を辿りながら、夏至の日に六ヶ所村まで歩いた。
傷つけられた自然に侘び、原発のない平和な世界を祈る巡礼Walk
walk9.jp

・日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
チェルノブイリ原発事故の放射能被災地や、湾岸戦争後イラクで急増する白血病の子供達へ医療援助を続けている。『六ヶ所村ラプソディ』松本上映会の事務局　　http://www.jca.apc.org/jcf/

＊友人、知人へ伝える

「この間、六ヶ所村ラプソディーという映画を見てをみていろいろ考えた。
うまくいえないけど、この映画、見て欲しいと思ったよ。」

『六ヶ所村ラプソディー』公式ホームページ http://rokkasho-rhapsody.com

『６ラプカード大作戦』１人から６人へ、再処理工場のことを伝える葉書を送ろう。
http://postcard6.seesaa.net/category/2435440-1.html

＊青森県知事へ伝える

「再処理工場の問題と歴史を知りました。引き返す最後の機会だと思います。
世界中が、再処理工場の本稼動を心配しています。日本原燃との契約を考え直してください。未来の命と、青森県の豊かな食べ物のことを考えてください。
原子力政策に頼らない青森県の未来を、私たちも応援します。」

〒030-8570　青森県青森市長島１－１－１　青森県知事　三村申吾　様
青森県庁原子力安全対策課　TEL 017-734-9252　www.pref.aomori.lg.jp
FAX 017-734-8071

実行委員の鈴木眞美さんが作った「私のできること」

＊六ヶ所村の村長に伝える

「再処理工場の問題と六ヶ所村の歴史を知りました。引き返す最後の機会だと思います。世界中が、六ヶ所の本稼動を心配しています。日本原燃との契約を考え直してください。原子力政策に頼らない六ヶ所村の再生を、私たちも応援します。」

〒039-3212　青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字野附４７５
村長　古川　健冶　様　　ＴＥＬ 0175-72-2111　eburi@road.jp
ＦＡＸ 0175-72-2607

＊再処理工場を推進する会社に伝える。

「環境や経済に対するリスクが大きすぎる再処理工場や原子力産業で、利益を生みだそうとしないでください。未来の命を考え、持続可能な自然エネルギーへの設備投資を支持します。」

『三菱重工』　〒108-8215　東京都港区港南2-16-5　三菱重工ビル
ＴＥＬ：03-6716-3111　FAX：03-6716-5800
取締役社長　佃　和男　様

『日立製作所』〒100-8280　東京都千代田区丸の内1-6-6　日本生命丸の内ビル
ＴＥＬ：03-3258-1111　代表取締役　庄山　悦彦　様

『東芝』　〒105-8001　東京都港区芝浦１－１－１　芝浦ビルディング
ＴＥＬ：０３－３４５７－４５１１　　取締役会長　岡村　正　様

＊青森県の生産者に伝える

「私たちは青森県産の食品を安心して食べ続けたいです。是非、青森県と事業主体の日本原燃に、私たち消費者の声を届けてください。一緒に、再処理をとめましょう。」

〒030-0847 青森市東大野2-1-15 青森県農業協同組合中央会　御中
〒030-0830 青森市安方1-1-32　青森県漁業共同組合連合会　御中

＊（株）日本原燃に伝える

「放射能汚染が心配です。近くに活断層もあり何か事故があったら取り返しが付きません。再処理工場の稼動を考え直してください。自然エネルギー政策に転換してください。」

〒039-3212 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字沖付４－１０８
取締役社長　兒島　伊佐美　様

＊首相に伝える

「原子力発電に頼るエネルギー政策を自然エネルギー政策に転換してください。
世界中の国民が、六ヶ所村再処理工場の本格稼動を心配しています。
未来の命を考えてください。再処理工場は、環境、経済に対するリスクが大きすぎます。」

東京都千代田区永田町２－３－１　　www.kantei.go.jp
総理大臣　福田　康夫　様
ＴＥＬ：03-3581-0101　　FAX：03-3581-3883

＊野党第一党　民主党に伝える

「原子力発電に頼るエネルギー政策を自然エネルギー政策に転換してください。
世界中の国民が、六ヶ所村再処理工場の本格稼動を心配しています。
未来の命を考えてください。再処理工場は、環境、経済に対するリスクが大きすぎます。
環境や、平和を願う私達の声を、国政に届けてください。」

千代田区永田町１－１１－１　ＴＥＬ　03-3595-9988　www.dpj.or.jp

『私にできること』2007.9.24 作成　問い合わせ　jay_tamy@ybb.ne.jp

柏崎刈羽原発近隣の住民の声

柏崎刈羽原発の近くに住む、ＪＣＦの会員さんから届いたメッセージを紹介します。

中越沖地震で倒れた柏崎市の墓石

原発を再起動させるな

大西洋司（新潟市　62歳医師）

今回の中越沖地震で不幸中の幸いは、東京電力および国側のいう想定外（実は地元反原発団体の中では想定内）の地震ではあったが、今のところ、放射能漏れが最小限に抑えられていることであろう。

政府・東京電力・マスコミから流される情報は、「修理に長期間必要である」「耐震設計の再度の見直しが必要である」とか、あたかも再起動を前提にした情報ばかりである。

「活断層の上に原発を建ててはならない」という原則は、世界の共通認識であり、東京電力自身もホームページに書いている。

これ以上、人々の命と地球環境を放射能汚染の危険にさらさないで欲しい。ここでいう「人々」とは地元に住む人たちも、都会で電気を使う人たちも含めての話である。

この度の中越沖地震を、地震列島に建つ危険な原発に頼りながら生活する我々に対する天からの警告と受け取らなければ、早晩人類はチェルノブイリ事故を上回る未曾有の原発震災に見舞われるであろう。われわれ日本人は犠牲者を出さなければ、本質を見ることのできない愚かな人間集団なのだろうか。

中越沖地震と原子力発電所

笛木百合子（新潟県在住）

私は地震後10日目、7月25日に柏崎市に入った。海岸に近い住宅街で見た、屋根を残し全壊した家。家の形は残っているが玄関戸も廊下戸も襖もすべてなくなり、押入れの奥にしまってあったはずの家庭用小型金庫が丸見えの家。ブロック塀が倒壊し玄関に近づくことができない家。外見からは大丈夫そうだが、道路に面したガラス戸から中を覗うと物が散乱し片付けの手が入らず、人気のない家。車と共に潰れた車庫。傾いた電信柱。夏祭りの準備をしていた金比羅さまで倒壊した建物の中から見えたお神輿やちょうちん、紅白の幕。大きな石柱が倒れている…。海の方に目を向けると原子力発電所の大きな鉄塔が何本も見えた。

地震直後から雨が何度か降り、梅雨明けからの本格的な蒸し暑さも加わって、被災した人々の疲れがたまり始めていた。しかしライフラインは電気の回復だけ。肝心の水道は遅れ、ガスにいたってはいつ復旧するかわからなかった。飲料水は行き渡っていたが、家庭でも避難所でもトイレは大きな問題になっていたし、手を洗うことも口をゆすぐこともままならない。暑さの中、汗を流すため自衛隊の設営した仮設風呂まで歩いていくという生活。洗濯物が干された家を見かけると、きっと井戸があって、ここの人は無事だろうとわかる。

調理や入浴ができなくても人々は片づけをしながら、自宅や避難所から日常の仕事に戻っていた。支援する人もされる人も被災者であるという現実。

小さい子どもは本能的に家に入ることを拒否し、赤ちゃん返りをして大人の関心をひこうとする。高齢者や体の不自由な人は特別な配慮をされた食事とベッドと介護の揃った福祉避難所で家が片付くまで、又は仮設住宅に入居するまでを過ごした。また保健所の駐車場にはペット用避難所も開設されていた。避難所になっている小学校には「放射能被害避難用施設」という看板もある。その表示は、柏崎出身の人にとっては見慣れた景色かもしれないが、私は違和感を持った。大都会で電気が不自由なく使える生活を享受している人々は、原子力発電所と向き合う地元の人々の不安、恐怖、怒りを理解しているのだろうか？

柏崎市や刈羽村にその後何回か足を運び、お話を聞かせていただいた。初めのうちは、入れない家に残してきた「財布」「くすり」「位牌」「アルバム」が心配だという声が聞

かれた。また原発立地県静岡から応援に入った保健師は「この次はあなたたちの番だろうから、よーく見ておきなさい。こんどは私たちが助けに行ってあげるから」と何人かの市民から声をかけられたそう。

時間の経過と共に、家や生活の再建に向けて具体的な決断を迫られはじめ、お金の問題が大きくなってくる。「危険」の赤紙を張られた家に必要なのは、建て替えなのか改築なのか？田んぼは無事だが水路や機械小屋が崩れ、ローンの残る機械は潰されてしまった。もう来年は稲作を放棄しようか？と迷っている。地震で蔵が飛び上がった、お仏壇が転がり落ちた、畑仕事をしていて転んだ…など地震のすさまじさを語りながら、原発でも〝おおごと〟が起きたのではないか？と心配した。

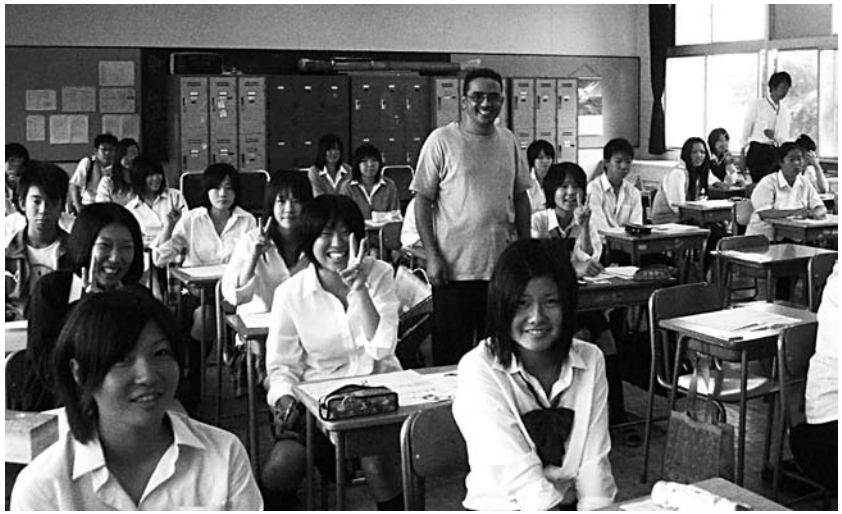
人気のない家。物が散乱したまま、片付けの手も入っていない。

地元では30年も前から軟弱な地盤、活断層の存在が指摘されてきた。死者11名、重軽傷者１９５４名、全壊家屋１１１８棟という犠牲を払った土地で、世界一の発電量である柏崎刈羽原子力発電所を今後どうするのか、注目が集まっている。今回の地震では原子力発電所自体の被害は、黒煙を上げて燃える屋外の火災という軽微なものだけ？で済み、放射能漏れがごくわずかであったので、家を放棄して避難するという事態は奇跡的に免れた。過去、データ・事故隠しなど様々なトラブルで地元住民との信頼を損ねてきた経緯がある原発である。再稼動させることは絶対不可能であるということが証明されたのではないだろうか。

これから、強い風が吹き、雪が積もる寒い冬がやってくる。家中隙間だらけになったと嘆いていた人。玄関の戸が閉まらなくなったと言っていた人。みなさんこの冬をどう過ごすのだろう。

一人暮らしのおじいさんと住んでいた小さな黒猫がいた。おじいさんは、地震を契機に施設に入ってしまったという。あの黒猫は誰か近所の人に、面倒をみてもらえているのだろうか？

イブラヒム先生スピーキングツアー



バスラの産科小児科病院の院内学級の先生として働くかたわら、薬の調達などで活躍中のＪＩＭ―ＮＥＴローカルスタッフ・イブラヒム先生が８月７日来日しました。
たくさんの皆さんの応援で感動的なツアーになりました。

バスラの院内学級
イブラヒム先生スピーキングツアー

ＪＩＭ―ＮＥＴでは、この夏、イラクのバスラで院内学級をしているイブラヒムさんを招き、全国を講演して回るスピーキングツアーを企画しました。さまざまな人たちが各地で受け入れを整えてくださり、約1ヶ月間で合計21ケ所ものツアーになりました。訪れた都市は、大阪・広島・徳島・長崎・久留米・宮崎・横浜・東京・旭川・札幌・駒ヶ根・松本で、ひとつの街で複数回の講演をこなす日もありました。

この間、受け入れ先の皆さんや、会場に足を運んでくださった方、新聞などで来日を知った方などからたくさんの応援をいただきました。呼びかけを始めた6月から10月上旬までの郵便振込みによるこのツアーへのカンパは１５０万円を超えました。ありがとうございました。このお金はバスラ院内学級運営費用ならびに通院が困難な子ども達への交通費を始めとする支援金として大切に使わせていただきます。

さて、ここでは主に長野県内のツアーに絞って報告をしたいと思います。9月に入ってからの長野県内滞在中は、ツアー終盤ということもあり、体調を整えつつ、学校と病院の見学に重点を置いた日程となりました。

始まりは9月7日、駒ヶ根市にある赤穂高校で高校生への講演からでした。言語文化コースの1クラスでの講演で、高校生たちは真剣に話を聞いていました。また、イブラヒムさんにとてもしっかりした感想を伝えていました。

9月8日、松本で小学校を訪れました。このクラスではイラクのことや核のことや平和についての学習を続けてきて、バスラ院内学級の子どもたちが描いた絵も今年の2月に見ていました。その院内学級のイブラヒムさんが実際にやって来るということで、歓迎してくれました。ちょうど今年春に中学生になった皆さんですが、イブラヒムさんからすると、日ごろイラクで接している一人の女の子は同じくらいの歳なのです。

その後、ＪＣＦのコーディネートで、信州大学病院の院内学級見学をすることができました。他の病院の院内学級を見て、それぞれの状況や課題を共有するというのはとても貴重な機会だったと思います。

9月9日には、松本市内のあがたの森文化会館を訪れました。1時間ほど講演しましたが、屋外だったこともあり、何気なく通りかかった人も立ち止まって聞いていました。敷地内には図書館もあり、子どもに声をかけたりしながらの見学でした。

忙しく毎日を過ごしていて、ホームシックになる暇もなかったとおっしゃるイブラヒムさんですが、イラクの子ども達の様子や病院のことなどを気にしつつ、ラマダン前の9月10日に帰途に着きました。バスラに戻ったイブラヒムさんは、さっそく現場復帰しています。

ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局　**小森麗子**

※全国各地での様子はＪＩＭ―ＮＥＴスタッフブログ8・9月のコーナーで詳しく見ることができます。
http://blog.livedoor.jp/jim_net/

あがたの森文化会館図書館で、子どもと仲良しになったイブラヒム先生

イブラヒム先生のお話を聞きに集まった筑摩小学校の卒業生の皆さん

想像するということ

片岡寿美江（信州大学医学部４年）

9月8日、私はイブラヒムさんの松本訪問にボランティアとして同行する機会を得た。まず筑摩小学校での講演、続いて信州大学病院内の院内学級を見学、夕方からは中央公民館の調理室で、彼の松本の友人とともにイラク料理を楽しんだ。

私は映画が好きで、暇さえあれば見ている。世界の紛争・内戦を描いた作品もよく見る。映画ではもちろん虚構も混じるが、実際に起こった出来事と認識して私たちは見ているわけだ。そこに描かれる無益な殺し合い、死んでいく子どもたち、親をなくした無力な孤児たち…。このようなさまを見て、私たちは（私は）この悲惨な状況にある人たちへの同情よりも先に、自分がこの地ではなく日本に生まれたことの幸せを感じてしまう。ＣＮＮでスポーツ情報のあとに、血だらけの子どもが泣き叫んでいるテロ情報の映像が流れても、想像力が働かない。

ところが、である。イブラヒムさんの語ることがらのひとつひとつは私の生活に直結した。双子が授かった話（私にも双子の娘がいる）、彼の妻が白血病で亡くなった話（私の連れ合いが病気で死んだら?）、親友がおさなごを残し爆発で亡くなった話（となりのだいちゃんのパパが急死!?）。目の前の人が語ってくれる言葉の力、私たちはこ

れに対しても想像力を失うほど鈍感にはなっていない。

筑摩小学校で行われたイブラヒムさんの講演。対象はこの間まで筑摩小に通っていた現中学一年生の子どもたちだ。担任だった三輪先生のご指導のもと、総合の学習としてチェルノブイリ原発事故について学んできた子どもたちである。彼らと同年代のイラク人の子が白血病にかかっても、貧困や混乱から十分な治療が受けられないこと、その子たちを院内学級で学ばせたいと奔走するイブラヒムさんの困難などがスライドをまじえて伝えられる。イブラヒムさんの静かだが力強い語りを、通訳の加藤さんが簡潔にすばらしいタイミングで訳してくださり、とてもわかりやすく気持ちの伝わる講演だった。

講演の最後に三輪先生から「イブラヒム先生に質問がある人はいますか?」と言われてもなかなか手を挙げることができなかった子どもたち。この日の感想を今の時点で述べるのは難しいよね。けれど、今日の話の内容に彼らの経験が追いついた時、「中学の時に外国の人からこんな話を聞いたな」と思い出し、その結晶を取り出す作業をきっとするだろう、と思ったら感動して胸が熱くなった。同時に教師という仕事の聖性を思った。

次に訪問したのは信州大学の大学病院内にある院内学級だ。旭町小学校、中学校から派遣された二人の先生が迎えてくださった。講演でのイブラヒムさんが「伝道者」とするなら、ここでの彼は「職業人」だった。イブラヒムさんはここの先生方と同業者としての思いを共有したようで、とても熱心に質問していた。「つらい治療を子どもに受けさせるために、私は物を買ってあげて説得するが、それをどう思うか」ということをしきりに尋ねていた。院内学級の教師として勉強を教えるという任務以外に、医療と患者とを円滑にコーディネイトする役割をも彼が担っていることがわかった。「物でつる」ことへの罪悪感、しかし他に方法があるのか?という悩みがひしひしと感じられ、彼の実直さを感じた。

私が印象的だったのは、「いま一番したいことは何?」という質問に対し、日本のターミナル期にある白血病の子どもと、戦時下のイラクの子どもたちが同じ答えをする、ということだ。その答えとは…「勉強がしたい」一番

信州大学病院内の院内学級で（前列左端が片岡さん）

したいことは勉強、と答える（状況にいる）子どもがこの世界には大勢いるということを私たちは知っていなければならないと思う。

夕方からのイブラヒムさんは、中央公民館の調理室で料理人としての腕をふるった。料理中の彼は実にハイテンション。危険をかえりみず紛争地域内の空港へ支援品の薬を取りに行く「トランスポーター・イブラヒム」は一体どこへ？面食らう私たちを尻目に、食と美人を愛する陽気なおじさんと化していた。料理の助手をしてくれた女性には端から「Do you have a husband?」と尋ね、大概「Yes」との答が返ってきて、「Oh! No!」…このやりとりがエンドレスで続き、調理室は笑いに包まれた。「人生は贈りもの」という言葉をふと思い出した。彼につながる日本の友人たちが二十人ほど駆けつけ、共にイラク料理を楽しんだ。

食後には、集まった私たち日本人からイブラヒムさんへ一言ずつ述べる機会が設けられた。支援について、国家間の協調（敵対）関係について、共感するということについて、みんながそれぞれ考えているし、何かをしたいと思っている。冒頭に述べた「想像力」について言えば、みんながイラクの人たちの状況について思いを馳せることができた。今回、イブラヒムさんに同行して私が得た宿題は、その想像力を持てたあとに何をするか、ということである。身近な人に伝えていく、信頼のできる支援団体に協力する、政治的な面からの直接的根本的解決をめざす…など。一個人として、はじめのふたつは今すぐにでもできそうだ。そして、職業人としての自分に果たして何ができるか、を思いつつ、これから学んでいきたいと思っている。

中央公民館調理室で美女に囲まれて、イラク料理の腕をふるうイブラヒム先生

モスクワ便り

2007年10月12日から13日の夜、ハリー・ポッター第7巻の公式販売が、全ロシアで始まった。全国の大書店は昼夜体制を敷き、夜間ショーも行なった。祭典シナリオのコンクールを＜ロスメン＞出版社が公告している。ハリー・ポッターの販売価格は、ロシアでは14ドルに設定されている。

『ハリー・ポッター』の最新巻の、販売発行部数は180万部になった。ロシアでの発行部数が記録的になったにもかかわらず、すでに増刷が計画されている。『ハリー・ポッター』ロシア語訳第一号は、2001年に出版された。6年間で、6編合わせて、900万部発行された。世界中で、6巻は64カ国語に翻訳され、3億2500万冊発行された。

ロシアにおける第7巻は、8月15日から、ボルガにあるロシアの最も大きな出版社で印刷された。このために、最新版の内容について情報がもれないように、きびしい対策が取られていた。例えば、英語版の印刷所と同様、労働者たちがテキストの断片さえも見ることができないように、文字通り、暗闇の中で印刷した。電子ファイルは印刷所の所長の下に保存された。電子での仕事は、職場と結びついたUSBポートと外部から切断された局地網のみを使って行なわれた。本に関する仕事の最初から最後まで、取引には、10～15人の警備員が随行した。

一方、フランスでは、16歳の少年が、「ハリー・ポッターと死の秘宝」をイギリスで公式発行された数日後に独自で翻訳し、誰でも見られるインターネットに公開した。若者は、この仕事でお金を得るつもりは無かったので、無料だった。ポッターのフランス語翻訳は公式には終わっていない。フランスでは10月26日に出版されるであろう。

現在、人気ある本の海賊版が世界中のたくさんの国で出版されている。例えば、中国、そしてロシアでも。何よりもロシアのブロガー（ブログ作成者）たちは、“ポッター軍”計画の下に結集し、イギリスでの本発売2日後の7月23日、翻訳の下書きを公表した。

ハリー・ポッター第7巻は、出版の歴史の中でも、もっとも速く売れた書籍となった。販売開始24時間で、1100万冊以上が売れた。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

新しい器

NO.29

宮尾 彰

最近、障害者の雇用促進を考える集会で某事業所の責任者Aさんからお話を聞く機会がありました。彼の職場では、昨年末一人の身体に障害を持つ女性を雇用したそうです。

彼女が初出勤した朝、所員全体の前でAさんは彼女自身の口から『してほしいこと、してほしくないこと』を皆に直接伝えてもらいました。

この最初の挨拶が功を奏して、彼女も、彼女を迎えた所員も、お互いが不安を抱かずに関係が作れ、今ではしっかりと職場に定着されているそうです。

実は、Aさんには既に、彼女の他にも障害を抱えた人材を苦労して迎え入れた経験があったのです。

あるとき、年度の途中で人事異動の内示がありました。その際『ぜひ君の部署で預かってほしいのだが…』と上司から頼まれたのは、七歳年長のAさんの元上司でした。

久しぶりで会った元上司Bさんの顔はどす黒く、眼は生気を失っていました。鬱病を病んでいたのです。

次の日から、出勤しても机の前に座っているのがやっと、という状態の彼を見て、Aさんは途方に暮れました。そんなある日、二人だけのとき、Bさんがポツリと言いました――

「…こんな俺でごめんね」

この一言の前に、Aさんはまったく無力である自分に気がついたのです。その日から、鬱病についての猛勉強が始まりました。参考になりそうな本はすべて読み、東京に出かけて研修セミナーにも参加しました。

しばらくたって、Aさんは自分が孤軍奮闘しても、職場の空気が変わらないことに気がつきます。彼の思いが、現場でBさんをめぐる部下の動きとして現れてこないのでした。

意を決して、Aさんはある日の所長会議でBさんの現状をオープンにしました。さらに、それまで自分が集めた鬱病に関する資料を配って、会議の中でメンタルヘルスの勉強会を始めたのです。初めは、『鬱病になるのは怠け者だ』といった誤解や『どうして俺がこんな資料を読まされなきゃいけないんだ』という無関心がほとんどでした。それでも、Aさんは粘り強く鬱病への理解を求め続けました。

今では職場内の理解も深まり、冗談まじりにBさんが、『所長は毎日鬱病患者に対して言っちゃいけないことばかり言って困るよ…。』と笑えるようになったそうです。

お話の最後に、Aさんはこう語られました。

「彼のお陰で、本当に勉強しました。誰よりも、私が一番優しくなれたと思います。ひとりをしっかりと尊重することで、確実に組織全体が成長したんです」

またとないチャンスを与えられ、新しい一歩を踏み出したのは、二人の障害者だけではありませんでした。社会的に「弱者」と言われる存在を受け入れる過程で、Aさんの職場も生まれ変わったのです。

人間の弱さが組織の結束力を強めるきっかけになったとは、どういうことでしょう。

障害者の弱さを受け入れるのは常に非常にやさしい。そういうものだと思い、そのためにこそ自分はそこにいるのだと思えるからである。しかし、自分の弱さを受け入れるのはむずかしい。自分の弱さはたいていぜんぜん期待していないからである。自分にはただ長所だけを見ようとする。成長はまず自分の弱さを受け入れることから始まる。

ジャン・バニエ『共同体―ゆるしと祭りの場』

バニエは、フランスで約四十年前に二人の知的障害者と一緒に生活を始めました。彼の開いた共同体『ラルシュ（方舟）』は、障害の有無を超えて生きる場として、静かな歩みの内に世界的広がりを見せています。私たちがお互いの弱さを受け入れたとき、そこには新しい器が生まれるのです。

АНЕКДОТ

◆Мужчины хотят развратных отношений с красивыми женщинами,
женщины наоборот: красивых отношений с развратными мужчинами.

◆Если Ваш фотоальбомчик маленький и тоненький, а фотография одна и страшненькая - это паспорт!

◆Когда Господь Бог хочет наказать американцев, он насылает на нихураганы, землетрясения, потопы и пожары. А когда хочет наказатьостальные народы, он насылает на них американцев.

◆Последние исследования показали, что в пиве содержится высокая концентрация женских гормонов. После трех кружек вы уже плохо управляете машиной,после 6 хихикаете от всякой ерунды, а после 12 вынуждены мочиться сидя.

◆Разговаривают два футбольных комментатора:
- Как вам нравится игра этого футболиста?
- Он напоминает мне Достоевского.
- Но Достоевский же никогда не играл в футбол!
- Вот именно!

ジーマの

ロシア小話

◆男性は美しい女性との淫らな関係にあこがれる。
女性は逆に、淫らな男性との美しい関係にあこがれる。

◆あなたの持っている写真アルバムが小さくて薄いもので、その中の写真が一枚だけで、写った顔が恐ろしいものであるなら、それはあなたの旅券だ。

◆神様がアメリカ人を懲らしめたい場合、台風や、地震や、洪水や、火事などを送り出す。
しかし、それ以外の民族を懲らしめたい場合、アメリカ人を送り出す。

◆最近の調査によると、ビールには女性ホルモンを高濃度にする作用があるという。というのは、ビールを 3 杯飲めば、車の運転がおかしくなり、6 杯飲めば、くだらない話でくすくす笑うことになり、12 杯飲めば、おしっこはしゃがんでせざるを得なくなるから。

◆２人のサッカー・コメンテータが話している。
「この選手のプレイはどうだ」
「彼はドストエフスキーに似ている」
「でも、ドストエフスキーはサッカーをやった経験がないだろう」
「だから似ているんだ！」

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート―――

振替用紙のメッセージから

◎世界中の子どもたちが幸せに暮らせる事を願って…少しですが寄付いたします。

◎甲状腺がんやロシア、チェルノブイリ原発事故で病気になった人たちのためにお使い下さい。

◎保育器が早く届くことを願って支援させて頂きます。

◎ホスピタルコンサートで集まった寄付金です。

◎「グランドゼロ」を読む度に日常の雑用に追われている自分の生活を振り返り、チェルノブイリ、イラクにもっともっと思いを馳せなければ…と気持ちが新たになります。

◎「ナジェージダ２００７」で育った赤ちゃんが成人する頃には「真の平和」が訪れますように。

◎震災被災地の当方も、今日はひどいです。おまけに原発から５００～１０００メートル以内です。

◎広島、長崎の原爆といい、ベトナム戦争の枯れ葉剤といい、イラクの劣化ウランといい、アメリカ軍は人を何と考えているのだろう、と怒りを感じます。罪もない子どもたちが苦しむのは本当に切ないです。

◎暑い夏、62年前のあの日が思い出されます。戦争のない核兵器がない安心して住める世界がくることを望んでいます。

◎幼い子どもが悲しい思いをしませんように…。

◎新潟の原発のひどい実態の報道等々、原発は国境を越えた問題です。ねばり強い継続に敬意を表します。

◎神谷さんのイラク都市難民訪問報告の中で「宗派が違っても結婚しているカップルが大勢いる」とありました。やっぱりーと思いました。人間は国境が違っても、宗派が違っても、寄り添えるもののはず。仲たがいさせているものの正体はなんだろう。

◎子ども達に笑顔を、そして目に輝きを、皆さまの努力に感謝…。

◎少ない金額ですが誕生日の記念としています。

◎八月は日本の原爆の月、終戦の月、あってはならない事、二度とない地球に…。

◎「ひまわり」聴きました。「うたう」は「うったえる」ということ。

◎チェルノブイリの事故が起こった時、長男は私のお腹の中で4カ月の胎児でした。この子に未来はあるのかと心の底から思いました。一つでも多くの生命と魂が救われんことを祈ります。貧者の一灯、よろしくお願い申し上げます。

◎暑い夏でした。あと半月と思いつつ頑張っています。皆さまもくれぐれもご自愛下さい。

◎能登・中越の大きな地震が続き原発の耐震が不安になりました。福井は日本一原発が多いのです。

◎映画「見えない雲」若い方に見てもらいたい。

◎地震国日本の原発の怖さを実感しました。目に見えない放射能被害をくり返すことありませんように。９・11から6年、アフガンもイラクも早くもとの生活に戻してあげてほしいです。

◎避難している人が一日も早くイラクに戻れることを祈っています。

2007 年秋・募金のお願い！

☆　ナジェージダ 2007　☆

　ベラルーシ、ベトカ地区。チェルノブイリ原発事故による多量の放射性物質で汚染された地域だ。

　住民は強制移住させられ、医療スタッフも汚染を嫌って引っ越していった。地区病院のナジェージダ院長は、生まれ育ったこの地だから、ここで暮らす人々のために頑張る、と言う。

　高汚染地だからこそ、健康に対する人々の不安もひとしおだと思う。私たちは、ナジェージダ先生に会い、この地にこそ、新しい命を育み、希望をつないでいってほしい、と共鳴した。

　皆さんからベトカ地区病院保育器支援に、9 月 31 日現在、1,983,889 円のご寄付をいただきました。たくさんの応援をありがとうございます。

　ベトカ地区病院に現地購入見積をとってもらったところ、一台約 200 万円かかることがわかりました。何とか保育器二台を支援したいと思います。
引き続きの応援をどうかよろしくお願いします！

ナジェージダ＜希望＞ 2007 振込口座

郵便振替口座番号	００５２０－６－１０９９３
加入者名	ナジェージダ 2007

＊同封の振込用紙のナジェージダ 2007 に〇をして頂いても、
保育器支援に振り分けます。

ベラルーシの食卓

プロフ・アラカルト

―今日は、ソージ川の岸辺で、森のパーティね。
―飲み物とパンは私たち。
―ピクルスを持っていくわ。
―私は、いつものね。

チェチェルスクのソージ川で森のパーティをやろう。長い夏の日、涼やかな川風を楽しみながら宴の準備に散っていく。保健局の放射能測定士ターニャは、大きなお鍋を抱えて登場する。プロフ、それは故郷カザフの料理だと皆に振舞ってくれた。カザフは果物も豊富、豊かな所、とターニャは故郷自慢をしつつ、料理の腕もなかなかのものだった。
今夏、初めてカザフスタンを訪問し、何軒かで、それぞれの家庭の味プロフをご馳走になった。料理の本を開けば、ウズベキスタン・タジキスタン・トゥルクメニスタンと国ごとにも特徴があるらしい。
ターニャの味を懐かしみながら、どこの食卓でも美味しいプロフに出会った。
家庭料理は、作る人、およばれする人、皆になじむもの。

＜材料＞
米　500 g・牛肉　250 g・ニンジン　200 g・玉ねぎ　2 個・薬草　小さじ 1.5
チャービル粉末　小さじ 1・塩少々・えんどう豆 1/4 カップ・食用油　150g

＜作り方＞
1. えんどう豆を水に浸す。12 時間から 1 昼夜。
2. 米を塩を少し落とした水で 5 － 6 回とぎ、30 － 40 分お湯に浸す。
3. ニンジンを細かく千切りにし、フライパンで 15 分弱炒めてから火を止める。
4. 肉・玉ねぎ・ニンジンをフライパンに入れて、コップ 1 杯の水注ぐ。
5. すばやくえんどう豆と香辛料を入れる。
6. 沸騰後、25 分弱煮る。
7. かるく塩をふり、米を入れる。
8. 米より 1cm 弱上まで水を注ぎ、強火にかける。
9. 炊き上がった後、煮上がるまで 15 分蓋をしたまま蒸らす。

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

田んぼはすごいよ、面白いよ！

実行委員を募って企画運営された「六ヶ所村ラプソディー」松本上映会には、個性的なスタッフが集まりました。

この映画を上映したいと、実行委員会の度に、はるばる辰野から2時間近くかけて通った小沢尚子さんもその一人です。小沢さんは、出雲から六ヶ所村まで3ヶ月間かけて歩いた「walk9」にも参加して、その時の写真や感想を上映会で発表しました。

「人の側からでなく、自然の側に立つこと。海岸から海を見るのでなく、海から人を見る感性を持ち得た時、何が見えるのでしょう。人が病む以前に何倍も苦しんでいる自然があることを六ヶ所村で思い知りました。村は肌にヒリヒリ伝わる『悲しみ』と『不安』な気配に満ちていました。かつてどこに行っても感じたことのなかったものでした。ここまで私達に伝わるほどの痛みを、六ヶ所の自然は受けている。皆そのことに衝撃を受けました。『自然環境には意識がある』と知識としてでなく、からだで感じて身震いしました…」

上映会で受付を左から、布山、小沢さん、西澤さん

夏至の日に「吹越烏帽子」と言う霊山の頂きで、思想、宗教を超えた祈りと歌をささげてウォークは終わったと言います。

「山の緑深い森に抱かれて登る70人のこころは、いつしか喜びで満ちてゆきました。人と人、大地と大気とつながる事の中に再生への新しい息吹を感じたのです」

上映会まで何度となく開かれた実行委員会に、美味しい手作りおやつを届けてくれたのも小沢さん。小豆も餅米も自家製というヨモギ餅は、しみじみと味わい深いご馳走でした。

美味しい自家製のおやつといい、有機農業の話題といい、小沢さんは生え抜きの農家の人だと勝手に思いこんでいました。ところがもともとは歯科技工士で、インドに8回も行ったことがあり、本格的に農業を始めたのは7年前からと知ってびっくり、私のアンテナに「???」マークが立ち並び、是非お話しを聞きたくて、収穫の仕事が山積する9月末の午後、お宅に押しかけました。

国道153号をひたすら走り塩尻を過ぎ峠道を越えると、急に開けた場に出ました。子どもが取りやすいようにと、鬼が栗の木を撓(たわ)めてくれたという伝説のある天然記念物「しだれ栗」、その自生地があることで知られた小野の文化財小野宿問屋の並びに、小沢さんのお家はあります。この辺は宿場街や製糸業で古くから栄えた歴史のある場所で、小沢さんのお宅も宿場街の雰囲気を残す歴史を感じる建物でした。

小沢さんが丹誠した、なかよし米

お宅の裏庭の花畑や昔はお祭りのご馳走用の鯉を飼っていたという池跡を抜けて、軽トラを駆って、小沢さんが丹精している田んぼや畑、山を案内して頂きました。田んぼには17種の種籾を混ぜた混植米『なかよし米』の稲穂がたわわに実っています。種まきの時から混ぜるので、苗の生長もまちまちで、背が高いの低いの、ノギが長くて白いの赤いの黒いのと賑やかです。混植米は生命力が強く、きれいな上に、とっても美味しくて、収穫を待っているファンが多いそうです。

軽トラは道なき道（と私には見えました）を分け入って、小沢さんのプライベートキャンプ場（実は元畑）や、臙脂色の実が太陽に映えている高きびの畑、イノシシに食べられてしまったという大豆畑、収穫間近の里芋やサツ

マイモの畑を「見学」です。裏山がすぐ後ろにせまる谷間の畑には、夏の名残の日差しが光ります。

小沢さんの山でやっている山仕事塾「なるには塾」で、実習をかねて間伐したという檜の林は急な斜面に天をついて伸びていて、手入れの大変さを想像します。枝を払ったり、適当な間隔で間引かないと、木の生育はもちろん山の保全、水をためる力も失ってゆくのだそうです。「前は緑豊かで良いと思っていたふるさとの山が、実はぎりぎりまで混んで、もう間伐しても健康を取り戻せないくらいになっている」と知って愕然としたと言います。

他にも有機農業の仲間や動植物の研究者と一緒に「ひと・むし・田んぼの会」を5年ほどやっているそうです。田んぼの生きものを百姓が観察し、米だけでない「田んぼの恵み」を語る言葉をもち、それを伝え価値を支えてもらうことで日本農業の再生の糸口にしようとするものです。

この稲にとまった茶色の細いトンボは、ホソミオツネントンボといって、成虫のまま越冬して、春、田んぼに水が入ると産卵のためにやってくるトンボ。春には全身水色になるんだよ。

山と田んぼが繋がっているとっておきの静かな場所を歩くと、足下に小さなカエルが。

これはヤマアカガエル、普段は里山で暮らしていて、春先に産卵する時だけ田んぼに来るカエルなの。平野にはいないカエル。産卵の一週間ぐらいしか鳴かないので、めったに鳴き声を聞けないのよね。春は土手がニリンソウの優しいピンクに染まり、アズマイチゲやスミレ、エンレイソウが咲いて、それはそれは綺麗なんだよ、疲れた時はここに来るんだ、ここに来ると何だかほっとするの…

『田んぼで出会う花・虫・鳥』
発行所：築地書館（株）

小さな谷の水路沿いの場所は、周りがすっかり休耕してしまい、80歳近いおじいさんと小沢さんの田んぼだけが残っているという。

水路を通したり、草刈りをしたり、水害やイノシシから田んぼを守るのは本当に大変！それでもこんな小さな田んぼもつくるのはやめられないのよね。想像もつかないくらいすごい数の生きものがここを頼りに生きているのを知ってしまったから。水位が浅く、

暖かく、栄養がある水田は、いろんな生き物が子どもを育てるのに最高の場所。

ひと・むし・田んぼの会では色々工夫して生きもの調査をしているの。枠を何カ所かに押し込んで、その枠中に微生物以外の生き物が何匹いるか全部数えて、田んぼの全体量を推定したり、パイプを打ち込んで、取り出した土を5センチごとに洗ってイトミミズ類の数を数えて毎月の変化を観察したり。こうした観察を続けているうちに、メンバーみんなが田んぼの生きものの世界に深く感動していったの。

ここは確かに人が米を作るための場所なんだけれど、そこには想像以上の豊かで膨大な数の生物が緻密に影響しあい支えあっている。稲作が始まって以来、生きもの達は百姓の仕事のサイクルに―という事は乾いた田んぼに水が入り、また刈り取りの頃には乾いてしまう―という環境に生態をかえて順応してきたんだよね。長年かけて自然がつくられてきたということ、そして生き物たちと一緒に田んぼの中にいると、自分もその環の一部だと言うことが実感されてくるの。どこまでが自然でどこからが自分か境界がわからなくなるような気がする。

小沢さんのお話しを聞きながら田んぼや畑や山を歩くと、あたりの豊さに目が洗われ、心がゆるゆると溶けていきます。でもまた田んぼや畑や山を守る仕事の際限の無さの一端を知ると、独りで切り盛りする小沢さんは、どうやって遠い松本まで上映会のための時間を作っていたのかと、改めて脱帽です。

こんなに田んぼの生活を慈しむ小沢さんですが、若い頃はここの生活が大嫌いで、故郷に戻って来たのはほんの7年前なのです。小沢さんの長い旅のお話しが始まります。

かつて私は人がきらいでした。怖いし愚かで悲しいと思っていた。だから山や川ばっかりに行って、草や花が友達でした。なぜこんな苦しい世で、人として生きなければならないのか、子供の時からそのことばかり考えていました。高校を卒業すると、手に職をつけて自立したい、と大阪で働きながら歯科技工士の勉強して資格を取り、大阪の歯科で3年、塩尻で6年働きました。でも、いつも何か他にしたいことがあるはずだと感じていて、その何かがどうしても見つからない。「私は入れ歯を作るために生まれてきたんじゃないぞ！」という想いがいつも去来して、何をやっても満たされず、四六時中何をやりたいかと考えて苦しくてたまらない。だったら違う文化を観てやろうと、女3人インドに行くことにしました。それが今から25年前。

カルカッタからネパールに入り、アンナプルナのトレッキングの後、友人と別れて一人旅を。5ヶ月間あちらこちらとインドを旅して、いろんな人と出会い、家に泊めてももらいました。

ＹＭＣＡで知り合ったインドの若者の家を訪ねると、四畳半の部屋と三畳の土間の台所に6人家族が暮らしていて、私を泊めるためにお祖父さんが余所の家に泊まりに行って、ベッドを空けてくれたのです。家族みんなで歓待してくれました。ある日お兄さんがベッドに腰掛けて言うのです。

「家にはあそこにあるトランジスターラジオ1台しかない。お前たちはトヨタとソニーの他に何があるのか？」「俺たちには神様がいる。それでしあわせなのだ」

返す言葉が見つかりませんでした。

ゆっくり旅する間に「神さまというのは、どうやら私が思っていたものと違うらしい」と思うようになりました。ネパールでもインドでも人々は信仰の中に生きていることを強く感じ、その落ち着いた暮らしに惹かれました。日本に帰ってから神さまについて知りたくて、いろんな人に会いにいきました。何かものすごく知りたいものがあるのに、それが何かわからず辛かったのです。そんななかで出会ったインド哲学の話は非常に興味深く、もっと勉強したいと思いました。日本人に人気のシバナンダシュラム（僧院）の僧院長が日本各地を一ヶ月間講演した時は、日本支部の専従でお世話をさせてもらったこともありました。

その後インドでも有数の僧院であるラーマクリシュナミッションの僧院長に出会った時、ああ、やっとたどり着いたと思ったのです。誰でもそのお坊さまのそばにいるだけで、嬉しくて嬉しくてしょうがない幸せな気持ちになるのです。「慈愛」という言葉が人になったような、母そのもののような方でした。

その僧院へは正木高志さんが連れて行ってくれました。正木さんはインドを遍歴して哲学を学び農場と自然食レストランを経営していました。（「walk9」を主催したのも正木さんです）

ラーマクリシュナミッションでレストランの仲間と
（小沢さん、左から二人目）

この後、小沢さんは正木さんの熊本の自然食レストランで働く事になります。

最初は1年くらい勉強がてらに働くつもりだったのに、素人ながら何と11年も「アンナプルナ農園レストラン」で料理をすることになりました。途中でレストランをやめると言う正木さんの後を受け、仲間2人と共同出資にして続けることになりました。ところが言い出した仲間は次々と脱落、最終的には私が独りでやるはめになり、月に20万円を返済するために身を粉にして働きました。自然食レストランは手間がかかって利益が薄いので、たいてい働きすぎで5年が限度と言いますが…。

やがて原因不明の腹痛に苦しむようになり、病院に行っても原因がわかりません。休暇をとってインドに行き、僧院のメインテンプルに入ったとたんに、「自分の荷物は自分で背負いなさい」「力強く生きなさい！」という声が聞こえた気がしたのです。

「これは逃げていてもダメだ、やるぞ!!」と思って帰国したらお腹が治ってしまった。「何で自分だけがこんなに大変なことをしなければならないのか」というネガティブな気持ちが病気を作っていたんでしょう。それからは気が合うバイトの人がお店に参加してくれたり、吹っきれた途端に人が寄ってくるようになったのです。

「金は儲からんでも、笑ってくらそう！」と。光が見えるようになるまで3年かかったといいます。

さまざまな思い出一杯のレストランでしたが、２０００年問題を考えたのをきっかけに、お店を閉めて、辰野に帰る決心をしました。

辰野に帰って来た時は「木のために何かしたい」と思っていたので、帰るなり「ＫＯＡ森林塾」に通ったのを始め、「なるには塾」、「ひと・むし・田んぼの会」と矢継ぎ早に世界が開けて自分でもびっくり。「田んぼってすごいよ、面白いよ」と、ことある毎に熱く話していたら、いつしか学校に招かれて「お米を食べて田んぼを守ろう」とか「木を使って山をきれいにしよう」と話すようになりました。

町の暮らしから、大地にしっかりと根ざした暮らしに変わり、また深く自然を見つめ感じようとする中で、心も変化してゆきました。「人の数だけ信ずる神の形がある」と言いますが、私にとっては「自然」こそ神の現れとして愛せるものだと確信したのです。今、

ここで自然に包まれ、又自然のために働きたいと。

そんな折、正木さんが「walk9」を始めました。「どんな思想、宗教の違いがある人たちも、自然（地球環境）を守るということの前にはひとつになれる。これからはこのことが一番大事。日本では古来から自然を神として敬ってきた。日本本来のこの思想がこれから見直されてくるだろう」と言う正木さんの言葉には深くうなずかされました。

環境問題を考える時、「昔には帰れない」という言葉がよく聞かれます。

農薬も化学肥料も使わない有機農業は、農家の人たちから「そんなことできるわけがない」とよく言われました。要するに昔には戻れないということですが。実際にやってみると、農薬は使わないぞ、と決意した時から田んぼや畑を見る、感じる、考える、という作業が始まります。農協のマニュアルどおりにやれば良くできるという世界から、「自分の感性で自然と向き合う」世界への転換が始まるのです。雑草の取り方、苗おこし、土作り、あらゆる所に土の状態や虫の状態を見ながらの工夫をしなければなりません。それが独自の「本当の技術」となるのです。少しだけ農薬を使う事はさらに難しいでしょう。どれをやったら環境にどう影響があるのか、しっかりした調査が必要になります。

いずれにしても「昔に帰る」のではなく「環境に悪いものは使わない（か減らす）」と決めた時からしか新しい技術は手に入れられないと思わされました。皆でハラを決めて工夫すれば、思いがけない世界が開けて来るのではないか、人間そうバカではないぞ、と思いたいところです。

小沢さんは「walk9」の終わりに、吹越烏帽子で、「六ヶ所と地球の母のために働かせて下さい、私の暮らしでできることをさせて下さい」と祈ったそうです。その帰路偶然立ち寄った温泉の売店で、すばらしく美味しいひじきごはんやおまんじゅうを買いました。どうしたらこの味、この柔らかさが出せるのか、いてもたってもいられず、包み紙にあった生産者の方に電話をしたそうです。突然の、

「会って作り方を教えて下さい！」

という見知らぬ人からの電話に、受話器の向こうのお婆さんは戸惑いながらも、その熱意に負けて、「家に来なさい」と言ってくれたのです。

後から知ったことですが、このおばあさんはそのあたりではなかなか有名な方で、タクシーを飛ばして駆けつけた小沢さんの前で、さまざまな製品を作ってみせてくれたそうです。

このおばあさんとの出会いは、「吹越烏帽子の神様の引き合わせ」だと小

キビ打ちは大仕事です

沢さんは言います。

今、小沢さんは食品の加工場と、週末には加工したおまんじゅうやお餅を食べる喫茶コーナーで、みんなが集える「場」を作ろうとしています。

台所で始まったお話しは、愛猫と一緒にキビ打ちをしながらの裏庭に場所を移し、怒濤の物語をお聞きしていたら、あっと言う間に夕暮れ…。

それにしても何かを求め、一途にどこまでも走り、出会った人に真っ直ぐに向き合う率直さとバイタリティーには、感嘆するばかりです。

「みんな私のことを癒し系とか言うんだけど、全然違うのよね！」

ははは、と笑う小沢さんですが、求めて求めて旅した小沢さんの激しさは、長い年月と出会った人々に削られて、今はとても穏やかで丸く見えるのでしょう。

長々のお邪魔を詫びて、小沢さんの家を出ると、山間の宿場町の秋の夕暮れには、時間を巻き戻したような風が吹いています。少し寂しさのある夕陽が家並みを照らして、不思議な静寂に包まれています。

長い旅で巡って探し当てたものを、故郷の地で、いろんな人と繋がりながら、守り育てようとしている小沢さん、素敵な集いの場所ができるのを心から楽しみにしています。

（事務局・布山）

Здравствуйте!

Dr.イドリス　3日間の松本

ＪＩＭ―ＮＥＴ構成団体で共にイラク支援をしている長崎の「アジアとむすぶ市民の会・長崎」と「子どもの平和と生存のための童話館基金」が、イラクの南部、バスラから癌専門医を招いて、長崎大学で研修を受けてもらっている。

今年は、８月６日、院内学級のイブラヒム先生と共に、アルーサドル教育病院からIdrees H. Al-Yaseri 先生が来日した。

長崎の原爆後遺症医療施設で研修を受けるイドリス先生は、ＪＩＣＡと信州大学で進めているイラク医師の日本研修プログラムに保健省推薦を受けていた。日本に来ているならば、直接会って話すのが一番と松本に来ていただいた。

突然の松本駅での登場だった。関係者の連絡不十分、たぶん大丈夫との信頼かもしれない。迎えの打ち合わせも無かったのにイドリス先生は、初めての日本一人旅で名古屋を通過し、松本まで無事到着した。これだけで、先生が異国で長期研修を受ける心構えが、伝わってくるというもの。

信州大学医学部小児医学講座小池教授の面接を終え、院内も案内していただいた。

ＪＣＦ事務局の近くにある本郷小学校の脇を通った時、校庭で遊ぶ小学生たちに目をやりながら「日本の子どもたちはハッピーだ。イラクの私の子どもたちは、怖くて外で遊ぶことができない」とつぶやいたのが印象的だった。

日本で研修したことを、母国に帰り、活かしていきたいとまじめに語るドクターだ。もし、来年春から松本に来ることが決まれば、先生の大切な２人のお嬢さんや、同じドクターであるパートナーは寂しいことだろう。イドリス先生は、そっと…自慢げに美しい家族の写真をみせてくれたのだ。

こんにちは！

がんばらないレーベル

バレンタイン　コンサート　For Iraqi Children

私たちは戦渦の下、薬もない、治療のための機器もないイラクで、絶命していく子どもたちの命を救いたい、と医療支援活動を続けています。

がんばらないレーベルは、白血病で苦しむ子どもたちの薬代と検査キット購入のためにＣＤ「ひまわり」を作りました。収益は、チェルノブイリとイラクの子どもたちのために使います。

今回は、第二弾 CD の発表とバレンタインキャンペーンにたくさんの方々に参加していただくためコンサートを行ないます。

☆日時　2008 年 1 月 26 日（土）　17 時～ 19 時 30 分（16 時 30 分開場）

☆場所　ニッショーホール（東京都港区虎ノ門　地下鉄銀座線・虎ノ門下車 5 分）

☆プログラム

・鎌田實　イラク報告

・坂田明　Yahhoo! コンサート

坂田　明・黒田　京子・バカボン鈴木・坂田　学

☆入場料　A 席 4000 円　B 席 3500 円（販売：ローソンチケット 11 月 20 日より）

☆主催　日本チェルノブイリ連帯基金

♪♪コンサート応援団募集中♪♪

日本を滅ぼす原発大災害

Book

坂昇二　前田栄作

原発震災で三大都市（東京・名古屋・大阪）が壊滅する？志賀原発の臨界事故隠しや、「世界で最も危険」と呼ばれる浜岡原発など、原発を取り巻く異常な現実を明らかにし、原発事故が起きたらどうなるのかをリアルにシミュレート。日本の原発は世界一危険！

完全シミュレーション
日本を滅ぼす原発大災害
著者：坂昇二、前田栄作
監修者：小出裕章
発行：風媒社
定価：1400 円＋税

これから起こる原発事故

Book

宝島社

シミュレーションが明らかにする原発事故の恐怖。東海二号炉で大事故が起こると、東京都民の半数がガン死、浜岡原発崩壊で、30 万人が急性障害死、なんと２５００万人が晩発性ガン死、若狭原発銀座の重大事故で大パニックの関西圏、そして東京さえも人の住めない荒野になる！原発問題の専門家からの警告。

別冊宝島 1469 号
改訂版　これから起こる原発事故
発行：宝島社
定価：933 円＋税

EXPOSED　東海村感光録

Book

金瀬胖

１９５５年の東海村の発足、それは日本の原子力の始まりと同時であった。44 年目の１９９９年９月、臨界事故の衝撃波は安全神話を崩壊させた。村を歩けば全ては裸で核に曝された「EXPOSED」。ＪＣＯ臨界事故以来、足繁く東海村に通い、まるでカメラをガイガー・カウンターのようにかざして、権力や産業システムの狡知と稚拙さが入り混じる原発周辺の海岸や街路に身体を曝して写した原子力神話崩壊の風景。

EXPOSED
東海村感光録
著者：金瀬胖（かなせ・ゆたか）
序文：西谷修
ブックデザイン
鈴木一誌＋藤田美咲
発行：新宿書房
定価：3200 円＋税

ビキニ事件の表と裏

Book

大石又七

第五福竜丸の乗組員だった著者だからこそ、伝えなければいけないことがある。ビキニ事件は、けっして過去のことではない。現在も被爆者たちは闘っている。そして、核兵器廃絶を訴え続ける著者。平和とはどういうことか？ビキニ事件を知らない若い人たちに問いかける。

これだけは伝えておきたい
ビキニ事件の表と裏
著者：大石又七
発行：かもがわ出版
定価：1500 円＋税

石の記憶　ヒロシマ・ナガサキ

Book

田賀井篤平

科学者の目がとらえた原爆の爪痕が六十余年の歳月を経て、いま甦る。東京大学総合研究博物館の標本室に眠っていた被爆の石たち、ヒロシマ・ナガサキの生き証人たちが、あの惨状を語り始めた…。謎に包まれたフィールドノートを一人の鉱物学者が読み解き、真実に迫る。

石の記憶　ヒロシマ・ナガサキ
著者：田賀井篤平
発行：智書房
定価：1200 円＋税

プーチン政権の闇

Book

林克明

大国ロシアで何が起こっているのか？絶大な権力を集中させるプーチン大統領の陰で、謎の死を遂げる記者や元外交官たち。彼の狙いは何か？ロシア・ウォッチを続けるジャーナリストが、独自の取材源をフルに駆使し、今もっともアンタッチャブルなプーチン大統領の『闇』を白日の下に晒す！

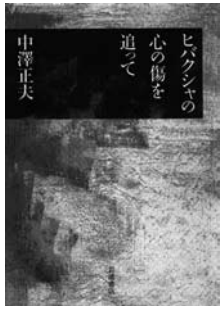
プーチン政権の闇
著者：林克明（はやし・まさあき）
発行：高文研
定価：1200 円＋税

ヒバクシャの心の傷を追って

Book

中澤正夫

「被爆者の心の傷」はきわめて重篤な、特殊なＰＴＳＤであり、それはいま生存している被爆者すべてがもっている。被爆後60年以上経ったいまでもなお、その傷は癒えない。それはなぜなのだろうか。長年、多くの被爆者と向き合ってきた精神科医の著者だからこそ聞くことのできた体験談、証言を紹介しながら分析している。



ヒバクシャの心の傷を追って
著者：中澤正夫
発行：岩波書店
定価：2000 円＋税

生かされている命

Book

山口彊

８歳のとき、母親が自殺、喧嘩で寂しさを埋めた。14歳のとき、父親が事業に失敗、格差社会の「天」「地」を味わった。29歳のとき、出張先の広島で被爆、命からがら戻った長崎で、二度めの被爆。そして、生きていくために米軍で通訳として働いた。戦争を生き抜いたひとりの日本人が、90歳から語り始めた、生きる力と平和への願い。

生かされている命
広島・長崎「二重被爆者」、90 歳からの証言
著者：山口彊（やまぐち・つとむ）
発行：講談社
定価：1500 円＋税

原爆詩一八一人集

Book

コールサック社

峠三吉、原民喜、栗原貞子ら故人から現在まで、１８１人の詩人の原爆詩２００編あまりを集めたアンソロジー。「僕らは広島で、あまりにも無惨な苦しみと悲しみとを体験した。その悲しみは人びとの懐情を破壊し、自命を亀裂させた。自死した原民喜も、そのうちの一人であった。またその無惨さの故に62年を経た今日もなお、多くの人が沈黙を強いられている。」（御庄博実「序文」より）

原爆詩一八一人集
編者：長津功三良、鈴木比佐雄、山本十四尾
装丁画：福田万里子
発行：コールサック社
定価：2100 円＋税

細川俊夫：Birds Fragments （鳥たちへの断章）

CD

Alter Ego

ヨーロッパを中心に活躍している広島出身の作曲家・細川俊夫の１９９０年代から２０００年代の室内楽作品６曲をイタリアのアンサンブル Alter Ego が演奏している。１曲目の「ATEM-LIED（息の歌）」はバス・フルート独奏のための作品…人の息が音になり、その音が歌となり、大自然の風のなかを舞い、虚空へと消えていく。

細川俊夫：Birds Fragments
（鳥たちへの断章）
演奏：Alter Ego
ジャケット書：瀧 正徳
レーベル：Stradivarius（Italy）
定価：2720 円
（輸入盤・タワーレコード）

今井信子：祈り― Blessing

CD

今井信子（ヴィオラ）、他

「ここに収めたバッハのコラールは、細川俊夫さんがヴィオラとピアノのために編曲してくださったものだ。心が震えるほど美しく、そして悲しい。弾きながら、嵐のような日々に悩んだことがすっと溶けて空の上に昇っていくのを感じた。苦しみと同時に得がたい時間を与えられ、今ここに辿り着いた自分がいる。これが祈るということなのだろうと思った。」（今井信子・ライナーノーツより）

今井信子：祈り― Blessing
演奏：今井信子（ヴィオラ）、他
発売元：セイコーエプソン
定価：2730 円（税込）

マーラー：交響曲第５番

CD

グスターボ・ドゥダメル指揮
シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ

貧富の差が大きく、犯罪が多発するベネズエラで、青少年を犯罪から守り、貧困層の子供達を救済するために、社会政策として、子供達への音楽教育プログラムが国家的規模で行われている。その頂点に立つ「シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ」の演奏は、音楽する喜びに満ちあふれ情熱的だ。

マーラー：交響曲第５番
演奏：グスターボ・ドゥダメル指揮
シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラ
発売元：ユニバーサル・ミュージック
定価：2500 円（税込）

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

◆ＪＣＦ会費振込口座

賛助会費	5,000円
特別賛助会費	30,000円
事務局ガンバレ会費	10,000円
郵便振替口座番号	00560−5−43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520−0−81078
加入者名	ＪＣＦ／イラク支援

グランドゼロ GROWING ZERO JCF

第 73 号

発行日　2007 年 10 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金
イラスト題字　貝原 浩
イラスト　小林裕子
表紙デザイン　酒井隆志
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
協力　オフィスエム
寺島仁美
ＪＩＭ―ＮＥＴ
風樹光
佐内朱
印刷　電算印刷

■編集後記

「六ヶ所村ラプソディー」松本上映会は託児も大繁盛、30 人を越す申し込みがあった。幼児を預けて、上映会に参加した若いカップルも何組かいて、監督講演も熱心に聞き、託児に感謝して二人で子どもの手をひいて帰っていった。自分の子育ての頃を思い出して「少しずつ世の中の流れは変わっているのかも…」と、ちょっとうれしい感慨にふけっていたら、託児で奮闘した若いお母さんスタッフに一喝された。

「映画を見てもらうのは第一歩、六カ所を止めなくちゃ！」…。　（布山）

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」
ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円

・「ぼくたちの見たチェルノブイリ」
松商学園高校放送部 著（オフィスエム）1700 円

・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
神谷さだ子 著（東洋書店）600 円

CD

・「坂田明／ひまわり」
2500 円
JCF 理事長鎌田實が立ち上げた
「がんばらないレーベル」第 1 弾。

・「小室等／ベラルーシの少女」
（8cm シングル盤）1000 円

ポストカード・セット

・「JCF post card」：貝原浩（8 枚組）500 円

映画パンフレット

・「ナージャの村」800 円
・「アレクセイと泉」800 円

本橋成一写真集

本橋成一写真集

・「無限抱擁」
（リトル・モア）3800 円

・「ナージャの村」
（平凡社）3000 円

・「アレクセイと泉」
（小学館）3500 円

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/